

それって本当に介護拒否?!

～ユマニチュードを実践しよう～

法人名	社会福祉法人 福寿園
事業所名	特別養護老人ホーム田原福寿園（本館）
サービス種別	介護老人福祉施設
発表者 職種・氏名	介護職員・

現在、認知症フロアでは入浴拒否や口腔ケアの拒否などケアへの拒否がある方や自分の世界に入ってしまう職員の声掛けが届いていない方など様々な認知症の方のケアに奮闘しています。近年注目されている「ユマニチュード」を実践することで職員全体のケアが向上し、利用者、職員共に笑顔あふれる日常生活が送れるのではないかと始まった取り組みです。

まず、職員の意識調査を行いました。ほとんどの職員が困っていることがあったが、困っていることについて相談できていない職員が半数以上いること、困っていることの内容については介護拒否が多かったが、職員によって困っている入所者が違っていることが分かりました。職員から困っているとして名前の挙がった2名を対象に認知症ケアマッピングDCM法を行いました。

1人目はM・Tさん、男性、年齢は88歳、認知症。普段は物静かな方で、声を掛ければ返答はあるもののあまり積極的に喋る方ではありません。突然立ち上がる事が多く、その際に対応しようとする職員に対し、無言で強い力で職員を掴みひねったりすることがあります。顔つきはかなり険しく理由を尋ねても無言で返答はありません。怒ってしまうきっかけが分からない事が多くなにかヒントが得られないかと思ひ対象者に挙げました。

2人目はS・Tさん、女性、年齢は91歳、アルツハイマー型認知症。お話好きの方で、機嫌のいい時はリアクションも良くとてもいい表情で話をしてくれます。突然どこかを見て念仏を唱えたり自分の世界に入ってしまうこともよくあります。突然、大声をあげることが多く対応に苦戦をしています。

マッピング後、結果を踏まえて職員で話し合いを行いました。利用者の対応が上手くいかずに困っていたことが多くあったが、業務優先になっていて利用者としてしっかり関わる事が出来ていなかったことに気が付きました。マッパーさんと目が合っただけにこやかな表情を見せたM・Tさんを見て日々の利用者との関わり方について反省しました。そこで利用者との関わり方を見直しユマニチュードを皆で実践してみることになりました。

ユマニチュードとはフランス発祥のケアの技法で優しさを伝えるケアのこと言います。2012年から日本に導入されました。「見る」「触れる」「話す」「立つ」の4つの柱が「あなたのことを大切に思っていますよ」と伝える技術、「出会いの準備」「ケアの準備」「近くでの連結」「感情の固定」「再開の約束」の5つのステップで全てのケアを一連の物語のように実施します。

ユマニチュードとは、優しさを伝えるケア



ユマニチュードはフランス発祥のケア技法です。体育学の専門家であるイブ・ジネスト氏とロゼット・マレスコッティ氏によって、40年間におよぶ病院や施設の経験から生まれました。ユマニチュードとはフランス語の造語で「人間らしくあること」を意味し、ケアを受ける側と行う側の双方が「よかった」と感じられる介護を目指します。ユマニチュードのケアは、その人の能力を奪わないことに注力した方法です。2012年に日本でも導入されました。

4つの柱



「見る」「触れる」「話す」「立つ」の4つが『あなたのことを大切に思っていますよ。』と伝える技術。

5つのステップ



全てのケアを一連の物語のような手順で「5つのステップ」で実施する。

公式ホームページより引用
作成日：R6.7.20
作成者：鈴木伸乃香

マッピングをおこなったM・TさんとS・Tさんの不穏時と笑顔時について10日間、利用者を知るシートを使用し調査を行いました。喜んだこと・怒っていたことなど気づいたことを記入していきました。

M・Tさんの不穏時と笑顔時をまとめると、職員と目が合うと笑顔が見られたことが分かりました。M・Tさんが怒ってしまうきっかけが分からず困っていましたが、様子を観察してみると、職員としっかり目が合うと笑顔になっていることも分かりました。立ち上がったM・Tさんに対し後ろや横から声を掛けると表情が陰しくなっていました。正面から視界に入り目を合わせて声を掛けている職員には怒ることがほとんどなく穏やかな様子で「トイレ」や「腹が減った」などご自分の気持ちを伝えてくれていました。10日間の観察の中でM・Tさんのケアを成功させるコツは4つの柱の中の「見る」にあるのではないかと考え、全員がM・Tさんに対し「見る」の技術を実践することが出来れば、今より穏やかな時間が増えるのではないかと推測をしました。

続いてS・Tさんの観察の結果です。S・Tさんが不穏になる時間帯は夜間のパット交換の時間が一番多いことが分かりました。S・Tさんのパット交換が上手く出来ないと特に悩んでいる職員の普段行なっている夜間のパット交換のやり方を見せてもらおうと、ノックをせずに訪室し、声掛け

や説明が不十分なまま身体に触れてS・Tさんが大声で叫ぶ様子が見られました。反対にS・Tさんのパット交換について特に困っていないという職員のやり方を見せてもらおうと、まずノックをして挨拶をした後に、パット交換の説明をして声を掛けながら行っておりS・Tさんも終始穏やかな様子でした。このことから、S・Tさんは突然入ってきた知らない人に驚いていただけで、5つのステップの「出会いの準備」からきちんと始めることがケアの成功のコツではないかと考えました。

そこでケアに対する4つの対策を立てました。

一つ目は職員のユマニチュード技術向上のために、4つの柱と5つのステップの技術テストで全員がポイントを実践できているかをチェックしました。また利用者体験キットを使用した状態でもユマニチュード実践の勉強会を行い、視界に入り、視線を掴むポイントなどを勉強しました。利用者体験をすることで高齢者の気持ちを知る機会にもなりました。

二つ目はユマニチュードの外部研修に職員を派遣し、その職員に勉強会行なってもらいました。三つめは居室担当表を作成しスタッフルームに掲示、居室担当で知るシートを作成してもらいファイリングしました。成功体験の情報共有ができていないに対しては、今回のように以前から困っていたがなかなか他の職員に相談できていないことをも共有するためにスタッフルームにお悩み相談ボードを作成しました。普段入所者のケアで困っていることを書いて、アドバイスなどを皆で追記していくこととしました。

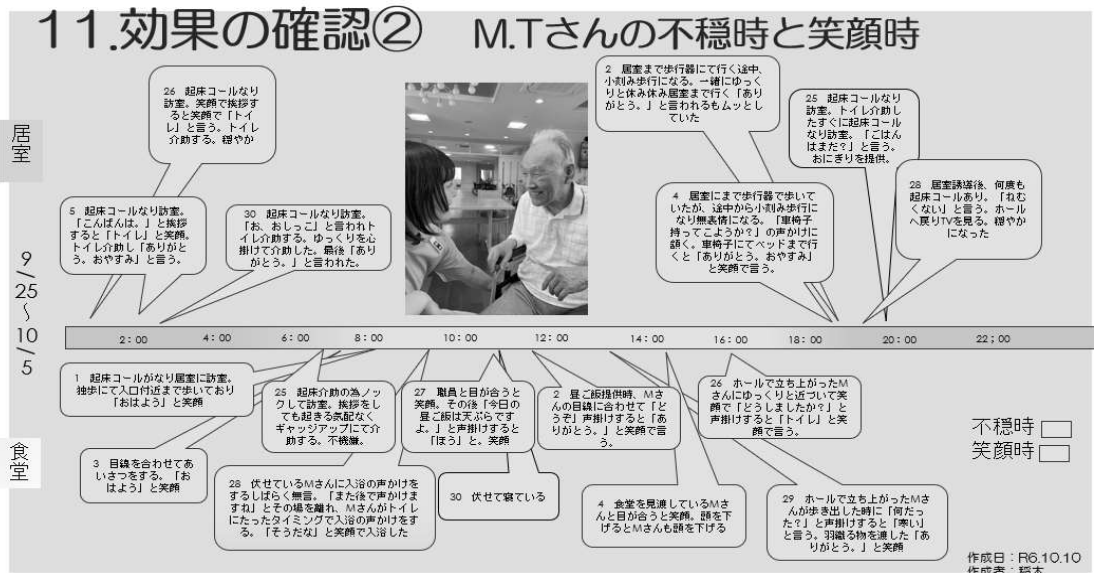
四つ目は利用者体験では、視野狭窄キットや耳栓を使用した状態で食堂ホールで過ごしてもらい、ついやってしまいがちな後ろからの声掛けや職員同士で関係ないお喋りをされたらどんな気持ちになるか体験してもらいました。利用者体験キットを使用した状態でユマニチュード実践の勉強会を行い、視界に入り視線を掴むポイントなどを勉強しました。



作成日：R6.9.15
作成者：山本

第9回 あいち介護サービス大賞

対策実施後、多くの職員が困っていたM・Tさんは対策実施前では突然立ち上がり、職員に対し無言で強い力で職員を掴みひねったりしました。男性利用者が怒ってしまうきっかけがわからず困っていましたが、ユマニチュードの4つの柱の「見る」の技術を実践し、視線を掴むケアを意識したことにより、対策実施後、男性利用者が以前よりも笑顔になる回数が増えました。



また夜間のパット交換時に大声で叫びケアの拒否が多かったS・Tさんには5つのステップを実践し、夜間のパット交換のコツがわかったことにより利用者が以前のように大声で叫ぶことはほとんどなくなりました。ユマニチュードを応用したケアを通して、認知症を見るのではなく1人の人間を見ているという本質を見失わない様にながら利用者との関係づくりを日頃から行っていくようにしています。この取り組み以降、利用者との日々の会話を重要視して、細目に接するようになりました。また、ケアのアプローチの仕方がわかったことにより職員のケアがしやすくなりました。そして職員、利用者の笑顔が増えたことがこの活動を通しての何よりの成果だと感じています。